

## 〈書 評〉

### 小野間正巳著 『かかわりで育む学び』

(金木犀舎, 2020 年, 134 頁, 1600 円 + 税)  
新川 靖 (関西福祉大学)

#### 1 本書の課題意識

本書は、静岡県浜松市及び磐田市の公立小学校、静岡大学教育学部附属浜松小学校を経て、関西福祉大学教育学部教授として、社会科を中心に教員養成に携わる小野間 正巳氏によるものである。

平成 29 年に告示された学習指導要領は、2030 年の社会を見据え改定されている。そこには、資質・能力の 3 本の柱による整理、日本型アクティブラーニングともいえる「主体的・対話的で深い学び」、社会に開かれた教育課程、カリキュラム・マネジメントなどの多くの新しい視座が盛り込まれている。さらに、本書が出版されたこの時期は C O V I D - 19 の影響が世界的に始まっている。このように大きく教育が変わる中で本書は発刊されている。

しかし、このような状況下においても本書がテーマとしたのは教育にとって不易な「かかわり」である。現代の子どもは、自分の言葉で表現する力、人間関係をよりよく形成する力が不十分であるとし、成長のために必要な「かかわり」が求められるとしている。

そして、「人・もの・こと」と主体的にかかわる学習を展開することが、これからを強くたくましく生きぬく力を育てていくことであるとし、教師や学校、学習の展開のあり方について明らかにしていこうとしている。

#### 2 内容構成

本書は、「はじめに」と「おわりに」を除き、5 章から構成されている。以下では、各章と

それらに属する各節についてその概要を紹介する。

第 1 章 かかわりを育てる教師かかわりを育む学び

第 2 章 かかわりを育てる教育課程

第 3 章 かかわりによって市民的資質を育てる社会科と評価～協働提案型社会科を事例にあげて～

第 4 章 かかわりで自立の基礎を育てる生活科

第 5 章 かかわりで自立を促す総合的な学習の時間

第 1 章では、「教師」の在り方について整理されている。まず、我が国における「教師」について整理し、そこから、教師自身が子どもと「かかわる」とはどういうことか、子ども達を「かかわり上手」にするための支援とはどのようなべきかを述べている。そして、学校教育の在り方、教育評価などを踏まえ、これから教師に求められるものとは何かを論じている。

第 2 章では、「教育課程」についての整理がされている。まず、我が国の教育課程の法令法規上の位置づけや、カリキュラム・マネジメントの整理を行い、次に、教育課程の種類や特徴について論じている。次に、我が国の学習指導要領がどのような変遷をたどってきたのかをまとめ、平成 29 年に告示された学習指導要領について整理している。そして、それらを基に学力と成長を保障する教育課程と評価へと論を展開

開していつている。また、教科の変遷、生活科や総合的な学習の時間の誕生についても整理している。

第3章では、協働提案型社会科の事例を中心に、教科学習の中における「かかわりあい」について述べている。まず、協働提案型社会科と、建設的相互作用や21世紀型スキルとの関係を整理し、授業のイメージについて論じている。そして、実践事例として、①小学校6年「わたしたちの願いを実現する政治～高齢者福祉を考える～」、②小学校6年「新しい日本へのあゆみ」の2つを挙げ、その具体を示している。

第4章では、生活科におけるかかわりとその授業づくりについて示している。生活科がどのようにして誕生したかをまとめ、その特質について整理している。そして、実践事例として①小学校1年「なかよしたんけんたい」②小学校1年・2年「はくわたしのパンを作ろう」③小学校2年「とっておきの春を見つけよう」④小学校1年「みんなで遊べる夏の遊びを作ろう」の4つを挙げている。それぞれの事例は、スタートカリキュラムや家庭との連携といったテーマを持って選ばれている。

第5章は、総合的な学習の時間（以下、総合）における単元づくりを中心に構成されている。まず、総合的な学習の時間の特質について整理し、単元や学習テーマをどのように設定するかについて論じている。そして、実践事例として、①小学校3年「昔さがしの旅に出よう」、②小学校4年「私たちの海、D海岸を守ろう」、③小学校5年「自分の味を発見しよう」、④小学校6年「自分ができことをしよう」の4つを挙げている。

### 3 本書の特徴

本書の特徴の1つ目は、「かかわり」を大きなテーマに据えつつ、これから求められる教師

の在り方、教育の在り方について論じているところである。社会の複雑な変化に応じて、様々な授業形態への対応や、ICTの活用などが言われ、一見、教師は、「新しいもの」へ対応することが重要であるように感じる。しかし、それは、「これからの社会で求められる力」という教育で育んでいきたいものの変化しているということであって、「人が人とかかわりながら育つ」という教育の営みの本質には大きな変化がない。「かかわり」を重視した本書は、そのような考えに立つのではないかと評者は捉えている。それは、著者が公立小学校等の教育現場で教育実践を積み、管理職としての教職員の育成に携わったことが大きいのではないだろうか。本書には、それらの経験に加えて、教師を目指す学生への教育を通して得た、教育全体に対する俯瞰的な視点を基にした、若い教育者達へのメッセージであるとも受け取れるのである。

また、教育課程に注目しているところも興味深い。「かかわり」となると教師と児童、児童同士といったコミュニケーションが中心となりがちであるが、本書では、教育活動全体を見通すといった視点で、教育課程を取り上げ、単元づくりや評価の在り方について論じている。教師が授業をし、評価していく営みをどう組織していくかが、一つ一つの「かかわり」に先だって必要であるという著者の考えに気づかされる読者も少なくないのではないだろうか。

そして、それらの具体として、社会科、生活科、総合的な学習の時間を取り上げて、どのように「かかわり育む学び」を展開するのかという実践事例を示している。それらの事例の中には、理論編で述べられた単元づくりの中で活かす「かかわり」、実際の学習場面における教師と子どもとの「かかわり」等が示されている。それと同時に、社会科や生活、総合などの授業づくりの基本も示されているのである。

このように、本書は、「かかわり」を中心として教師としての基礎・基本とは何かを深く考えることができるものである。特に若い教師や教師を志す学生に一読をお勧めしたい。